
書 評

『私がクリスチャンになるまで：清末中国の女性とその暮らし』

アデル・M・フィールド著／蒲 豊彦訳(2021年)東方書店

大江 平和¹⁾*

【要 旨】

本書は19世紀後半、アデル・M・フィールドというキリスト教のアメリカ人女性宣教師によって、中国華南の農村女性を描いた貴重な記録の日本語訳である。評者はまず著者について紹介した後、本書の構成と概要を述べ、本書の成果と、とくに印象深かったトピックについて、本書が歴史史料として扱われる際に生じる惜しまれる要素を述べる。本書は三部構成をとる。第一部は16人の女性が淡々と自分の物語を語る。それらはアデルの目には「不幸」の二字に彩られたものばかりである。第二部は著者の女性および女性をめぐる社会事情について描かれていて興味深い。第三部は著者の布教活動の様子が分かるような文章が集められている。評者は本書の成果は二点あると考える。第一に、翻訳者によって、アデルという無名の一女性が歴史の表舞台に登場させられたこと、第二に、19世紀後半中国華南の農村に生きる女性の姿が浮き彫りになったことである。惜しまれる点としては、第一に、詳細な日時が不明なこと、第二に、布教の上で重要なステーションの運営方針が明確に示されていないこと、第三に、キリスト教を受容した後の中国女性たちの内面的変化に関する記述が少ないこと、を挙げる。本書は蒲氏の翻訳によって、アデルの筆致を損なうことなく、平易でこなれた翻訳に仕上がっており、読みやすい一書となっている。

キーワード：清末中国、女性、クリスチャン、バイブル・ウーマン

Book Review

Pagoda Shadows: Studies from Life in China

Adele M. Fielde(1884), Translated by Toyohiko KABA(2021), TOHO Bookstore

Heiwa OOE¹⁾*

【Abstract】

This book is a Japanese translation of a valuable record of rural women in southern China written by an American Christian female missionary named Adele M. Field in the late 19th century. The reviewer first introduces the author, then describes the structure and overview of the book, the results of book, and the topics that were particularly impressive to her, and discusses the regrettable aspects that arise when the book is treated as a historical document. The book is divided into three parts. In the first part, 16 women calmly tell their stories. In Adele's eyes, all of them are colored by the word "misfortunate". The second part is interesting in that it describes the women and the social circumstances surrounding them. The third part is a collection of writings that gives an insight into the authors missionary activities. The reviewer believes that there are two achievements in this book. First, the translator has brought the unknown woman named Adele to the forefront of history, and second, it has highlighted the lives of women living in rural southern China in the late 19th century. It is unfortunate that, the exact dates and time are unclear; second, the management policy of the station, which is important for missionary work, is not clearly stated; and third, there is little description of the inner changes of Chinese women after they accepted Christianity. Mr.Kaba's translation of this book has been completed in a simple and polished way without compromising Adele's writing style, making it an easy-to-read book.

Key words: Last Qing Dynasty, Woman, Christian, Bible woman

¹⁾ 順天堂大学国際教養学部・教育講師 (Email: h.oe.ry@juntendo.ac.jp)

[2023年9月17日原稿受付] [2025年1月14日掲載決定]

1. はじめに

評者はこれまで1920年代中国の児童福祉事業を担った北京香山慈幼院の創設者である熊希齡の財務運営を研究してきた。最近熊希齡の妻や娘が、北京香山慈幼院の運営にどのように関わったのかに興味があり、女性史やジェンダー史にも関心が広がりつつある。そうしたなか、「清末中国の女性とその暮らし」という副題に惹かれ、手に取ったのが本書である。本書は、中国近代における華南地域の庶民社会史研究を専門とする蒲豊彦氏¹が、史料調査の中で偶然出会い翻訳したものである。本書は19世紀後半、アデル・M・フィールドというアメリカ人女性宣教師によって、中国華南の農村女性を描いた貴重な記録である。「訳者あとがき」にあるように、まさに「農村の名もない女性たちの日々の暮らしやその人生が奇跡的に書き留められている」(p.232)。

2. 著者について

本書の「訳者まえがき」によれば、アデル・M・フィールドは、1839年ニューヨークに生まれた。父親はペンキ屋兼大工で、バプティスト派キリスト教信者であった。アデルは16歳で中等学校を卒業、教師を目指して州立カレッジに入学し、1860年に卒業した後は教職に就いた。ところが1864年、カレッジで友人の兄弟サイラスと出会い、アデルの人生に大きな転機が訪れる。サイラスはアメリカン・バプティストの宣教師としてバンコクへ赴任する準備をしていたが、1864年二人は婚約する。サイラスが先に単身でバンコクへ出発した翌年、ミッションの教師に採用されたアデルは、彼の後を追って、いったん香港へ赴く。そこで、サイラスの訃報を知り大きな衝撃を受けるが、アデルは当初の志のままにバンコクに向かう。当時、バンコクには、中国広東省東部の潮州・汕頭地方出身の中国人移民が多かった。そこでアデルはまず潮

州語を学んだ。1840年、アヘン戦争に敗れた中国は門戸を開き始めた。バンコクの宣教師たちも1858年頃から汕頭に移り始め、それに伴い本部も汕頭に置かれた。1873年アデルもバンコクから汕頭に移る。汕頭でアデルが注力したのは、現地のバイブル・ウーマン、すなわち中国人女性伝道師の育成であった。このほか、アデルは本格的な潮州語辞典をはじめ各種の著作を刊行した。1889年健康を害したアデルは職を辞し、17年間におよぶ宣教師生活にピリオドを打つ。アメリカに帰国後、アデルは講演や著述活動をしながら、婦人参政権運動等に深く関わる一方、新たに生物学を学び、アリの研究に没頭した。1916年アデルは77年の生涯を閉じた。あえて艱難辛苦の人生を選び、逞しく生き抜いたアデルは、きわめて稀有な女性であったといえよう。

3. 本書の構成と概要

本書は、*Adele, Pagoda Shadows: Studies from Life in China*, W.G.Corthell 1884の全訳をベースに、アメリカン・バプティストの機関紙 *Baptist Missionary Magazine* に掲載された著者の文章数篇と、著者が編纂した民話集から民話を一篇加えて構成されている。

本書の構成は次の通りで、内容は三部からなる。

訳者まえがき

はしがき

序文

第一部 女性が語る女性の物語

第二部 社会と習慣

第三部 布教と女性信者

図版一覧

訳者あとがき

以下ポイントを絞って概要を述べ、評者がとくに印象深かったトピックについて歴史的観点から所感を述べることにしたい。

¹ 蒲豊彦氏の近著に『闘う村落：近代中国華南の民衆と国家』（名古屋大学出版会、2020年）がある。著者の30余年にわたる研究の蓄積に加筆し、「通史」として再構成した力作である。

第一部「女性が語る女性の物語」は、「中国の女性や女性クリスチャンの生活史」を描いたものである (p. i)。16人の女性が登場し、淡々と自分の物語を語る。タイトルはそれぞれ「小さなそよ風の物語」、「瑞おぼさんの自伝」、「竹で出来た龍(快の物語)」、「得金(得金の物語)」、「林水」、「悲しみの一〇分の七を失う蘭」、「惜の決意」、「一晩の仕事」、「海賊の島に育つ草」、「錦」、「深みの外へ」、「朝霧」、「夕暮れの光」、「家の中の霊が、どのようにして家から追い出されたのか：容の語る物語」、「南隴教会を支える人たち(蓮の物語)(真宝の物語)」である。

結婚後自死した「そよ風」以外は、すべてキリスト教に帰依し、中にはバイブル・ウーマンになった者もいる。著者が中国で暮らしていた十年間に聞き取った女性たちの語りは、著者からみれば総じて「不幸」という二字に彩られたものばかりである。いくつか例を挙げてみよう。

まず結婚である。「小さなそよ風」の語りを通して著者は次のように述べる。結婚は「奴隷の生活の始ま」(p.11)り、「数百世代に及ぶ習慣」(p.10)であり、「異議を唱えるための前例」(p.10)はなかった。当時、女の子は15歳位の適齢期になると、わずかな結納金とひきかえに、会ったこともない男性に嫁ぐ。婚家に入ると、夫の母や祖母によって支配される。結婚から逃げ出す唯一の方法は「楽しい里帰り」(p.12)、つまり自殺であった。そのため、「女たちの間では自殺はありふれた」(p.12)ものであった。また、貧しい農家にとって娘を嫁がせることはお金を得る手段であった。「この国では女の子を大切にしても仕方」がなく、「15歳ほどになるまで手元に置くことができるだけ」で、「すっかり他人のものにならねばならない」(p.55)ため歓迎されず、「瑞おぼさんの自伝」によれば、

瑞おぼさんは、「7歳で婚約をさせられて家を出され」(p.13)た。

続いて伝統的な信仰である。「どこにでもそこ特有の神様が」いて、「このほかに、台所の神や、新月と満月、八節²、さらにそのほかの時々には拝む神様があり、一年に40回も拜んで」(p.24～25)いた。お参りの都度お供え物は欠かせない。「そのお金を作るため」、「田畑の作物」や「太ったブタ」を売ったりした (p.15)。著者の観察からは、キリスト教を受容する前の、伝統的信仰に対する信仰心がどれほど厚かったのかがうかがえる。布教をミッションとする著者からすれば、それは不幸をもたらす根源として映ったのであろうことは間違いないが、女性側からすれば、伝統的な信仰を受容することに、何ら疑問は挟む余地はなかったと思われる。

加えて、女性たちに肉体的な圧迫を強いたのは纏足³であった。纏足とは、少女の足首から下を布で強く縛り、小さく変形させる中国独自の風習、あるいはそうして形成された小さな足を指す。五代⁴の頃に上流階級で始まったとされる。その後次第に庶民にも広まった。しかし、女性たちがキリスト教を知った後は認識を一変させた。「足を変形させるのは、神が足を作るときに型が私たちに合っていない、私たちは自分で神の作品を改良できる、と宣言すること」であり (p.47)、それは「邪悪で有害が習慣だ」(p.46)と捉えるようになる。

以上のように第一部では、当時の潮州・汕頭を含む広東省東部の農村の女性が置かれた境遇がどういうものだったのか、女性たちにとって結婚、伝統的信仰や纏足などがどれほどの深い悲しみと無力さと肉体的苦痛を与えていたのかが、著者の視点で生々しく描かれている。

第二部「社会と習慣」では、「女性および女

² 立春、春分から冬至までの8つの節気のこと。

³ ドロシー・コウは、纏足はたしかに残酷であるに違いないが、中国の女性たちが生活の中で力を得るためにそれを必要としており、女性の視点からすれば理にかなった習慣だったと従来の通説に一石を投じた。ドロシー・コウ著 (2001年)、小野和子+小野啓子訳『纏足の靴：小さな足の文化史』平凡社、2005年、p.7。

⁴ 中国唐の滅亡から北宋の成立までの間に、黄河流域を中心とした華北・中原を統治した5つの王朝を指す。

性をめぐる社会事情を主題」(p. i)にして、アデル自身の視点が描かれている。19のテーマはそれぞれ「女性の地位」、「子どもの生活：四男の物語」、「嬰兒殺し」、「纏足」、「結婚式」、「姿を見せない花婿」、「住居」、「異教徒の風習の不便さ」、「心霊術」、「かまどの神」、「ある祝宴の起源」、「木彫りの裁判官」、「石の女神とその隊列」、「尼僧」、「講」、「私たちの薬屋」、「旅のあれこれ」、「中国人女性伝道師」、「言語、文学、民話」である。

各テーマに沿って、アデルが実際に見聞した記録とその率直な感想が綴られている。例えば、「嬰兒殺し」は、アデルにとって「恐ろしい事実」(p.113)であった。女性たちは「恥ずかしさに顔を赤らめることもなく、罪の意識もなく、自分の子どもを何人も殺していることを普通の会話の中で」(p.113)アデルに語ったという。そこでアデルは男女の子どもの死亡比率を知るため、中国の他地域にいる女性宣教師に協力を求めて統計をとった。他地域とは、芝罘、通州、張家口、漢口、寧波、蘇州、福州、アモイ、広州、北京である。ここから、これらの地域には女性宣教師が存在し布教活動を行っていたことがわかる。アデルは汕頭の調査を担当した。大雑把な統計数値ではあるが貴重なデータであろう。アデルによれば、このような「悪習」つまり「嬰兒殺し」は、つまるところ「貧困と迷信」に起因する(p.120)。その解決方法は、「子ども殺しの原因となっている迷信をキリスト教が打ち破り、来るべき満ち足りた生活を、男性の子孫ではなく神に頼るよう両親を導く」(p.120)ことにあるという。

なお、「中国人女性伝道師」は、バイブル・ウーマンの教育や活動についても詳細に描かれ興味深い。教育については、「読むことを習ったことのない女性が、一年で四福音書と使徒言行録を読み、キリストの全生涯およびその奇跡」等を語れるようになるのは、珍しいことではない(p.198～199)。「10年の間に汕頭の私の訓練学校へ入った100人の女性のうち、3分の1

ほど」(p.196～197)が福音を平易な言葉で人々に教えることができるようになった。

活動については、「汕頭の学校から二人ずつ、連続3か月間出掛けていき」、地方のステーションの礼拝堂に隣接した部屋に滞在し、そこから周りの村々へ教えに行く(p.199)。「ひと組の女性がこうして10から30の異なった村で教え」、「月末には戻ってきて仕事の報告をし」、「一週間の授業と集会ののち、同じか、もしくは違うステーションへまた出掛ける」(p.199)。バイブル・ウーマンには「ひと月に2ドルと旅費」(p.199)が支給されており、それは「家を離れて仕事ができるぎりぎりのもの」(p.199)だった。バイブル・ウーマンは「半分ほどが纏足をして」おり、当然ながら纏足をしていない方が「より有能な働き手」であった。そのため、「大きな足のバイブル・ウーマン」は教師として引手あまたであったとされる(p.128)。

第三部「布教と女性信者」は、アデルが「どのように布教活動を行ったのかが分かるような文章を集め、第三部とした」(p. i)とあるように、訳者によって選別された文章で構成されている。内容は「中国での布教メモ」、「孤児院」、「綉金の自伝」、「韓江をさかのぼる」、「地方での仕事」、「初めて神のことを聞く」、「汕頭での女性祈祷集会」、「民話『アリの起源』」である。

第三部のなかで、アデルが訪問した貴嶼の孤児院について描かれている。その孤児院は「政府」がやっていて、「老女が雇われ」(p.207)、毎年100から200人の女の赤ん坊を受け取るが、男の子がきたことはない。生まれて12日目になり健康であれば、カゴに入れられ、村々に運ばれて、「まるで果物か子犬のように呼びながら売り歩く」(p.208)。「欲しいと思った女性は」、「気に入った子を選んで息子の嫁として育てる」(p.208)。「結納金と結婚の費用は100ドル以上掛かるため、母親の多くはこの方法で息子に嫁を取る」(p.209)。つまり著者によれば、孤児院は安価な妻の供給源でもあった。先述の第二部「嬰兒殺し」の中で、例えば蘇州、アモイ、

汕頭など孤児院や嬰兒院がある地域では、女兒があまり殺されることがないという結果が示されている。著者からすれば、殺されるよりは、生かされて孤児院に送られた方が「まだ心のやさしいほう」(p.208)であったのである。

4. 本書の意義と課題

本書の成果について、評者は二点あると考える。

一点目は、これまで無名だったアデルという一女性を歴史の表舞台に登場させたことである。ジョセフ・クック⁵は序文で、「彼女の宗教的活動の方法には」「独創的かつ非常に成功したものが多い。中国の女性がキリスト教を広めるために宗教的に働くことを教えられたのは、最近になってからだ。フィールド女史は、この新しい種類の働き手を導入した先駆者である」(p.3)と位置づけていることにも深く頷ける。

二点目は、都市部ではなく、華南の農村に生きる女性に寄り添い、つぶさに観察して描き出している点である。中国北部と異なる特徴として、華南の農村では、男性の働き手が東南アジアへ出稼ぎに出て、家へ仕送りするケースが珍しくない。汕頭港に出やすく交通の便が良かったことも一因だろう。本書では、そうした華南農村の女性たちのキリスト教との接触、受容、布教の過程が描き出されている。

最後に歴史的文献として本書を使用する場合に惜しまれる点についても記しておきたい。これは翻訳者に対するものではなく、著者に対するものである。

第一に、日時が詳細に記されていないことである。原書が刊行されたのは1884年とあることから、それぞれの語りはそれ以前であることは間違いないであろうが、アデルが女性たちの語りを書き留めた日時が記されていない。第一部に登場する女性たちについては、高くてもわずか40ドルほどしか結納金が支払われなかつ

たという記述がある一方で、「お嫁さんはとても値段が高く、少なくとも100ドル」(p.78)はするという記述もある。その理由は「お金がもっと増えたせいなのか、女の子が足りなくなったせいなのか」(p.40)という。もちろん家柄の他、年齢、容姿、土地柄の相違なども関係していると思われるが、かりに日時が書かれていれば、そうした40ドルと100ドルの違いがなぜ生まれたのかについても、より明確になったであろう。

第二に、布教にとって重要なステーションの運営方針が、明確に示されていないことである。信者が増えていくにつれ、布教の体制は組織化されていったと推測するが、ステーションの運営方針は、どのようなものであったのだろうか。それはミッションから託されたものであったのだろうか、それとも中国の実情に合わせて独自に作り出していったものであったのだろうか。バイブル・ウーマンは二人一組になって村々へ出かけ、福音を説いて回るという記述があるが、その日程、ルート、走行距離は誰がどういう根拠で決めたのだろうか。またアデルが最も力を注いだバイブル・ウーマンの養成のために創設された女子学校については、第三部「中国人女性伝道師」で触れられているものの、読み書きを習ったことのない女性に対し、具体的にどのようなカリキュラムで教育が行われていたのだろうか。本書に言及されていないのは惜しまれる。

第三に、キリスト教受容による中国女性たちの内面的変化に関する記述が少ないことである。キリスト教に心を動かされ、それを受け入れて信仰の道に入り、バイブル・ウーマンとして布教するに至るまで、女性たちの内面にはどのような変化がどのように生じたのだろうか。著者がいうように、周囲の反対を押し切って偶像を捨て、先祖伝来の多神教から一神教を受け入れたとすれば、大きな変化があったはずであ

⁵ 訳者注によれば、ボストンの牧師。

るが、果たして彼女たちはどのように感じたのだろうか。

5. おわりに

以上、本書について雑駁な所感を述べさせていただきました。評者が気づかなかった誤読があったとしたら、ご海容いただきたい。アデルの原文の筆致を損なうことなく、平易でこなれた翻訳に仕上がっており、大変読みやすい一書であ

る。さらに、中国の歴史に詳しくない読者にも理解しやすいように、豊富な図版や注が適宜つけられている。訳者の翻訳作業における苦闘に思いを馳せ、敬意を表したい。なお、『キリスト教史学』第76巻の「会員新刊紹介」に石川照子氏による書評が、WEB『東方』に戸部健氏による書評(2023年10月13日付)⁶がそれぞれ掲載されているので、参考にされたい。

⁶ https://www.toho-shoten.co.jp/web_toho/?p=4783